

火星



七曜抄

山尾玉藻

大南風鮪解体はじまりぬ

梅雨明の父のぬぐひし籐枕

いつたんは海に入りたる神輿かな

夕風の陣地の石の蹴られたる

仁丹の香のせし父の扇かな

大瀧へバスの鼻先そろへあり

あめんばう抓まば雫するならむ

床下に潮の入り来し円座かな

七夕の木賊を少し刈りにけり

杉苗の正しき朝の盆の雨

秋風に蛸壺の口向いてをり

さかあがり

飯塚 糸子

泳げること、自転車に乗れること、さかあがりが出ることは、幼児期から少女期に入る関門である。特にさかあがりは小学校の体育授業に取り入れられているため必死で来る日も来る日も校庭や公園の片隅で鉄棒にぶら下がる。やっと達成できたときの空の景色はすっかり変わる。「世界が逆さに回った」とある文章に表現されていたが、どこか別の世界を見たような経験をさかあがりは与えてくれる。

チヨコレート色の加はる雛あられ
百度石触れて紅梅までゆけり
二の丸へ続く抜け井戸しば桜
大粒の法然院の春の露
さかあがりして春風に出会ひけり

たんぽぽへセーラー服の来て止まる
墓穴を出でたる二重瞼かな
ダンボール箱をそれたるシャボン玉
大潮を蹴つて寄居虫流さるる
音たてて寝返りしけりラムネ玉
おむすびをメニューに加へ夏館
ワイン注ぐ音の届きしパセリかな
消火栓へくそかづらに這はれたる
差し指の差し遅れけり本の紙魚

火星作品 山尾玉藻選

一刀彫の百刀の光梅雨に入る 大和郡山 城 孝子

枇杷の実の向こうに見ゆる競馬場
さなぶりの相合傘となりにけり

子子と夕風分つ飛鳥駅

吊忍父の飲食すぐをはる

突堤の朝のうろくづ花火屑 明石 戸栗末廣

皮脱ぎし竹に雨粒二つ三つ

父の日のぼうふらに日の当りをり

蛇の衣山河見下す松の枝に

出発のロビーに朝の蛍かな

夏シャツの男ら数珠を持って余す 八幡 大山文子

朝曇玉虫厨子の大きかり

滝道に猫を拾うてしまひけり

が ン ば れ と 云 は ず 別 れ し 額 の 花
足 ひ れ の 干 さ れ て あ り し 夏 館
丁 寧 語 の 二 人 が 残 り さ く ら ん ぼ
蚊 遣 火 の 孫 に 男 の に ほ ひ あ り
水 旗 鍵 屋 の 辻 に 鳴 り に け り
で 虫 の 角 出 は じ め る 厨 な り
寺 町 の 鷺 の 模 様 の ひ と へ 帯
で 虫 に 開 い て み た り 躡 り 口
六 根 を 髪 ご と 洗 ひ 流 し け り
緑 夜 か な バ ー ム ク ー ヘ ン 畳 の 上
島 ご め に 乱 反 射 し て 夏 の 海
亀 石 に ま た が り 白 き 夏 帽 子
鳥 籠 の 次 に 水 た す 軒 忍

八 幡 飯 塚 系 子

兵 庫 大 東 由 美 子

吹 田 伊 藤 多 恵 子

選のあとに 山尾 玉藻

さなぶりの相合傘となりにけり 城 孝子

「さなぶり」は田植仕舞を祝う小さな宴。現在と異なり手植え時代は近所の農家との共同作業であった。一軒の農家から一人または夫婦で参加していたようだ。この句の「相合傘」は夫婦よりも一人ずつ参加した男女ととる方が面白い。互いの家までの距離だが、お酒の酔いも手伝い互いに男と女を意識しているのである。省略が効き俳諧味充分な小品。

突堤の朝のうろくづ花火屑 戸栗 末廣

早朝の魚釣りか、または海の民宿にでも泊った朝の散歩の景かと思われる。この場合の「うろくづ」はコンクリートに貼り付いた鱗、花火屑と共に脱け殻の景である。ここには新鮮な魚鱗も昨夜の美しい花火も無く、虚しさと淋しさが残っている。実景として存在する景であるところが強みである。

足ひれの干されてありし夏館 大山 文子

鳴門大橋の見える民宿に二、三度泊まったことがある。そ

この主人も素潜りをされ、足ひれがいつも干されていた。掲句も殆ど同じ景色であるが、民宿よりも「夏館」の方がアンパランスな俳味がある。

丁寧語の二人が残りさくらんぼ 伊藤多恵子

「丁寧語」にやや観念臭があるが、一句の内容の質は良い。「丁寧語」とは「〜でございます」に代表されるそれである。結局その二人が残されたのである。「さくらんぼ」が良い。

雨傘がつつじの芯を摘みてをり 木野本加寿江

この季語「つつじの芯摘む」は厳密に言うとは歳時記に載っていない。「緑摘む」などの芯摘みは伸びる枝の先の芯を摘むのである。掲句の場合、来年またつつじがよく咲くように終りかけた花そのものの芯を詰むのである。誰もが一度はこの情景を目にしてきた筈であるが、それを掬い上げてきた加寿江さんの手柄である。「雨傘が」の俗っぽい省略も巧い。

甘酒のすえたる味を知つてをり 加藤 君子
さうめんを食べる気になりあわたし 同

二句目は獅子座作品。へ塩茹での田螺の味を知つてをり

高明の句と同工であるが、「甘酒」の句にはそれなりの趣がある。「すえたる」は甘酒作りとしては失敗した時の句い、この後どぶろくとなる。君子さんの句は二句目に象徴されるように天真爛漫、自由無碍、悪く言えば無造作で我侷な作り方、それ故駄句も多い。俳句と一体になって遊んでいるのである。俳句的に良い齡をとっておられる。この手の作家に田中吞舟氏、紡車洞氏が火星におられるのは非常に頼もしい。但し八十を過ぎてから自ずとこうなることが必要である。

門燈に守宮ある家に戻り来し 波田美智子

「門燈」と言っても門柱に取り付けてあるようなものではなく、玄関の引戸の真上に付いている燈を想像する。アーム形で鈴蘭燈のようなひと昔前の門燈である。その近くに「守宮」がいるのだ。「ある家に戻り来し」がよい。「守宮」も「家」も「作者」もそれなりの年輪を重ねてきたのである。

とり替へてもろうて鳴りし草の笛 垣岡 暎子

美しい情景の句である。とり替えて貰った嬉しさと共に自分の草笛が鳴らなかつた悔しさもあり、ちよつと複雑な心境であろう。だが結局は嬉しいのである。

ごきぶりの腹の固さを踏みにけり 堀 義志郎

「腹の固さ」と述べているが、実際には「ごきぶり」の腹は柔らかく固いのは背の方である。踏んだ瞬間の厚みのある感触を「腹の固さ」と捉えたのだ。ぱりぱりと翅が破れるような感触を「腹の固さ」と捉えたともって良い。「背なの固さ」では句にならないところ、逆転させて成功。

土打てばみみずももいろ朝曇 長田 曄子

曄子さん宅は屋敷内に露の臺まで出るそうだから、恐らく掲句も屋敷内での景であろう。「朝曇」に対する「みみずももいろ」のももいろが良い。色に対する詩人の感性を感じる。

蟻の巣になかなか入らぬ蝶の羽根 元濱 靖子

三好達治の短詩に、

蟻が蝶を曳いてゆく ああヨットのようだ

があり、可憐で美しい。掲句はこの経過の後の行為である。ここには美しさは無く、蟻そのものの本性がある。必死の様子が見えて面白い。

(以下略)

玉藻俳句鑑賞

虫売りと向き合うて子のしづかなり 玉藻

〔火星〕平成十五年九月号より

虫売りの姿もあまり見られなくなつたが、それでも縁日の境内やイベントのある所、公園等子供の集まる所では見かけることがある。

今では虫籠もプラスチック製が大半を占め趣も変化しているが、子供が昆虫好きなことは変りが無い。静かに集中している子供は何を見ているのだろうか、甲虫、くわがた、その他種々の虫が想像出来る。元気に走り回っていた子供の静かな姿に、子供の一面がよく表出されている。

（高子）



恒星圈

大山 文子

沖ほどに波の暗さや青葉潮
茂り葉の中の寄生木知つてをり
パナマ帽に目礼返す京都御所
蓮池を銅鐸の音渡り来し
水打つてありし吉兆素通りす

吉田 島江

ホテルの灯岬にありし水母かな
花買ひに小舟でゆけり白日傘
花合歡に修道院の鉄扉鳴る
力瘤さげて渡りぬ葛橋
麦秋や沖よりみゆる石切場

飯塚 糸子

初生りの苺ふた粒遠忌かな
涼しさの柳に隣る海鼠壁
お向ひは藩醫の家系燕の子
マンゴの種が皿の上夕端居
古びたる鹿垣に透ける鹿の子かな

米澤 光子

十葉の盥を雨が叩くなり
くちなしを確かむる窓あけにけり
白緋かんかん帽の父が来る
石ぶみのバス停に人立葵
羅のかすかな香の風なりし

伊藤 多恵子

花ざくろに雨降つてゐる傘寿かな
目神山二十二番地浦島草
警官の直立不動花氷
風船の折り方忘れ早梅雨
柴犬の伏せと言はれし螢狩

獅子座

山尾玉藻推薦

村上留美子

松井倫子

走り根に端居の足を遊ばする
滴りの次の滴り山椒魚
梅雨入かな開けつ放しの通し土間
愛宕山へ螢一つ浮き上る

加藤君子

呆けたらあきまへんでと夏つばめ
ぼうふらのエアロピクスに日のさせり
さうめんを食べる気になりあわただし
青嵐や身よりはなさぬあかざ杖

堀義志郎

夜行便着きし閑空穴子釣
久々の晴になりけり羽抜鶏
夏至の夕ビル屋上の駐車場
引き潮に頭出す岩夕蜻蛉

松山直美

ただならぬ色となりきし夕焼雲
片頬を染めし実梅の匂ひけり
水無月の鷺行く空でありにけり
こめかみを押ふる指や文字摺草
薔薇園の真中熊手の立ててあり
潮入りの櫂若葉の川淀み
藻刈舟遊覧船とすれ違ふ
竹竿の先の刈藻に動くもの

城尾たか子

優勝の盾五つ置き蘭鏝守
城内に高校二つ若楓
神鈴の鈍き音なり梅雨晴間
金魚田に手足の長き男ゐし

西畑敦子

あまたなる羽蟻しづかに出でにけり
うかとして随心院の蚊に刺さる
あめんばう化粧の井戸に育ちをり
サンガラスはづし水琴窟を聞く